

で、リンも娘モトをつれて東京に出ました。そのときの警視庁長官ちやうかんは季昌しんを信しん頼わいして山形県から福島県へと重く用もちいてくれた三島通庸しみまみちつねが前の年から就任しゅうにんしていたのです。

十数年ぶりでもまた暮らすようになった東京は、以前いぜんとちがって、はなやかな都会たいになっていました。後あとになって、そのころの思い出をモトは次のように書いています。

「私が生まれたとき、父は四十歳、母は三十四歳でした。初めての子どもだったので、たいへんかわいがられたのをおぼえています。あのころは鹿鳴館ろくめいかん時代だいといわれて、西洋風せいようふうの文化や風俗ふうぞくをまねしたのはなやかな時代でしたから、私もきれいな洋服を作っていたとき、まわりにいろいろな美しい飾りかざりのついたかさをさして、東京を歩いたものです。」

警視庁の課長として収入しゅうにゅうもふえ、まわりのはなやかさとともに、リンの生活